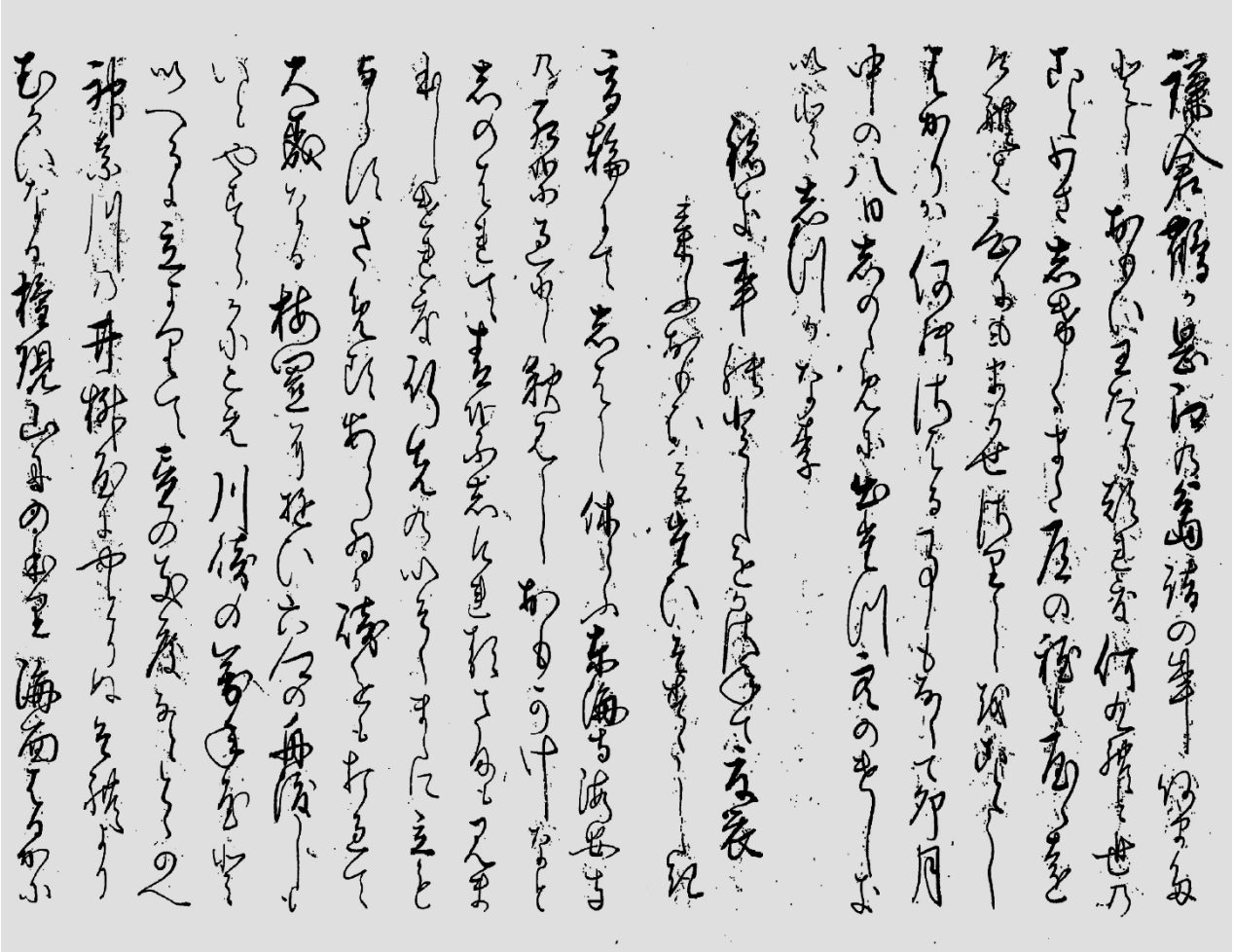
江の島日記　仁杉とも　著　鎌倉市中央図書館

第一日目　八丁堀～川崎～神奈川宿



1

江乃島紀行

第一日　江戸八丁堀～神奈川宿

鎌倉鶴が岡、江の島詣（もうで）の事、数多（あまた）

としおもひわたり（思）つれど、何くれと世の

ことわざ（繁）しげく（任）、また道の程もやゝ遠（今年）

ければ、心にもまかせざりしを、ことし

ばかりは何のさはる（障）事もなくて、卯月

中の八日しののめ（東雲）に出（いで）たつ。空のけしき（気色）

いとしづかなり。

ねぎ事（祈）の　としをかさねて（歳）夏衣（なつころも）

けふ（今日）おもひ立　たびぢ（旅）すゞしき（涼）

高輪にてしばし休らふ。東海寺（面影）・海安寺

の紅葉、過にし秋見しおもかげ（様）など

しのばれ（偲）て、青葉しげれる（繁）さまも見ま

ほしけれど、行先のいそぐ（急）まゝに、立も

よらず、さめず・あらいが崎（鮫洲）をも打過（新井）て、

大森なる梅園に遊び、六郷の舟渡（易）しも

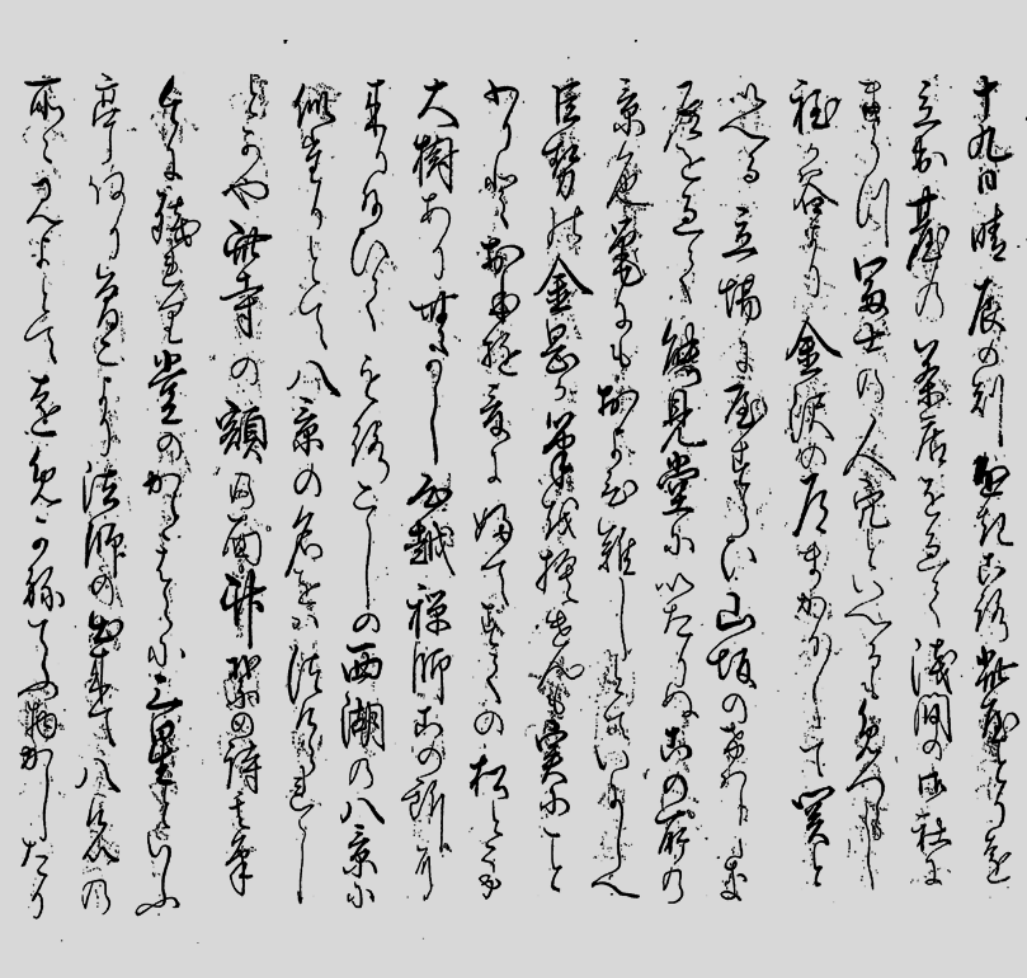
いとやすらかにこえ（越）、川崎の萬年屋（寄）と

いへる（云）に立よりて、昼の支度（調）などとゝのへ、

神奈川の井桁屋（宿）にやどりぬ。それより

むかひ（向）なる権現山にのぼり（登）、海面はるかに（遥）

- 思いわたる：思い続ける
- つれど：けれど
- ことわざ：行為、仕事。
- しげく：忙しく
- ねぎ事：祈る事、願う事
- 夏衣：夏衣を裁(た)つの意から「立つ」などに掛かる。
- 神奈川宿井桁屋のことか



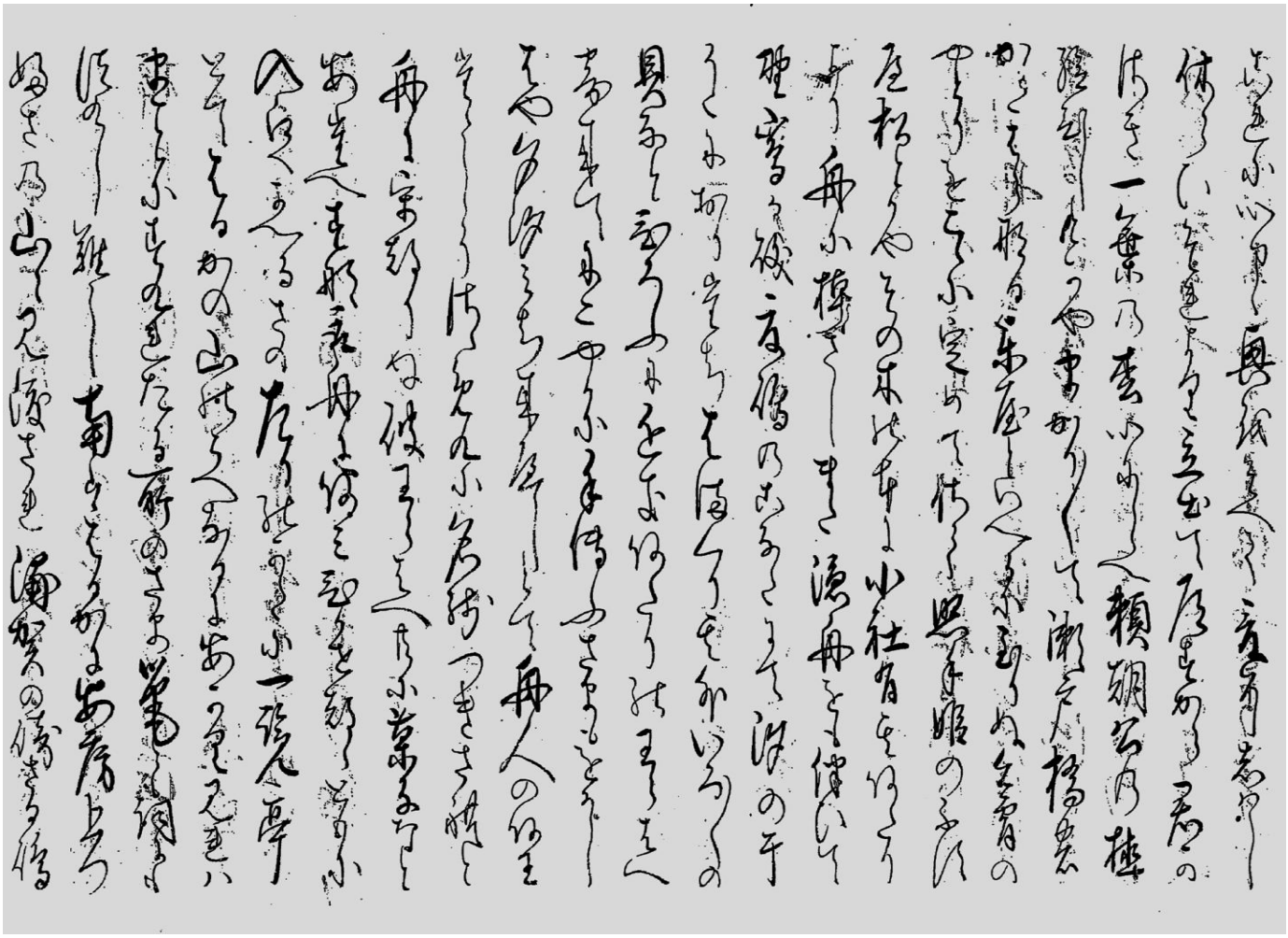
第二日　神奈川～関～能見台～金沢

野毛・本牧のあたりを見れば、ゆふげ（夕餉）のけぶり（烟）心ぼそくたちのぼり、うしろざまに見かへ（返）れば、田畑（傾）もまた一つの気色（宿）なり。やゝ日も西にかたぶけば元のやどりに帰る。

第二日　神奈川～関～能見台～金沢

十九日晴、辰の刻（たちいで）近きころ、此やどり（宿）を立出、台の茶店を過て、浅間の御社（詣）にまうづ。富士の人穴（みやしろ）といへるもめづ（珍）らし。程が谷より金沢（かねさわ）の道、まがり（曲）くて関（険）といへる立場（休）にやすらひ、山坂のけはしき道を過て能見堂（到）にいたりぬ。この所の景色、筆にもおよび難しとて、いにしへ巨勢（こせ）の金岡（かなおか）が筆を捨（筆捨）けんも、実にことわり（理）とおぼゆ（覚）。爰にふですての松とて大樹あり。むかし、心越禅師（唐土）この所に来り給ひて、もろこし（せいこ）の西湖の八景に似たりとて、八景の名をばつけ（付）られしとかや。此寺の額の面、竹葉（ちくよう）の詩（うた）、其筆今に残れり。堂のかたはらに三星といふ亭（ちん）あり。そこより法師の出来（いできたり）て、八けいの所々見よとて、遠めがね（眼鏡）てふ物かし（貸）たり

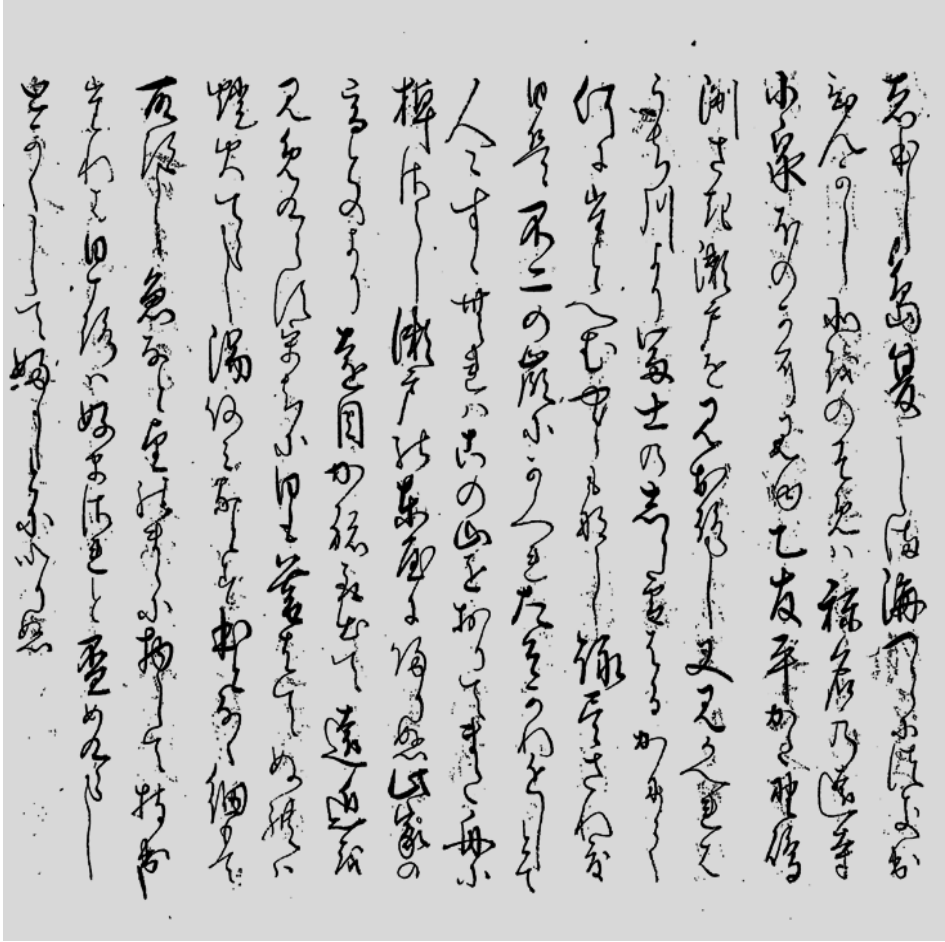
- 気色：景色
- 辰の刻：朝八時
- 関：横浜市港南区関
- ことわり：理、もっともなこと
- てふ：という



3

これにいたく興(甚)をそへて(添)、爰にしばし休らひ、それより立出て、道すがら君が崎一葉の松、いにしへ頼朝公の植給ひしとかや。まがり(曲)くゝて瀬戸橋のかたはら(傍)なる東屋といへるに至りぬ。今宵のやどりをこゝに定めて、さて照手姫のふすべ松とかや、その木の本に小社有。其あたりより舟に棹さし、また漁舟(此方)をも伴ひて、野島が磯、夏島のこなたにて、汐(潟)の干がたにおりたち、はまぐり(蛤)其外いろ(童部)くの貝などひろ(拾)ふに、近きあたり(辺)のわらはべ(童部)寄来て、にこやかに手伝ふ様もをかし。はやタ汐みち(満)来(くる)べしとて、舟人のあわたゞしうさゞめくに、名残つきざれど舟にうつ(移)りぬ。彼わらはべ(童部)共に菓子など(与)あたへ、すな取(魚)舟にあみひかせ(引)つゝ、ともに入江へかへるさ(遥)の左りの方に、一覧亭とて、はるかの山のうへなるにあがり見れば、まことに(実)すぐれたる所のさま(様)、筆にも詞(ことば)にも尽つくし難し。南ははるかに(遥)安房・上つふさ(総)の山々見渡され、浦賀の崎・さる島・

・すな取：漁(すなど)る　　・かえるさ：帰る時、帰りがけ
・上つふさ：上総



第三日　金沢～鎌倉～長谷

烏帽子島面突

えぼし島・夏しま、海づらにつき出、

東望

ひんがし北をのぞめば、称名の遠寺・

潟

小泉ほのかに見ゆ。乙友・平かた・野嶋・

崎

洲さき・瀬戸を見おろし、又見かへれば、

内白遥

うち川より富士のしら雪はるかにて、

譬よみ

何にたとへむやうもなし。詠尽されど

隠黄昏

日は不二の嶺にかくれ、たそがれ近しとて

人々のすゝむれば、この山をおりて、また舟に

棹さし、瀬戸の東屋に帰りぬ。此家の

殿鏡おちこち

高とのより遠目がね取出て遠近を

巡

見めぐらすうちに、日も暮はてぬれば、

照浴

燈火てらし湯あみなどす。ほどなく網もて

とりえ

取得し魚など、望のまゝに物して持出し

たれば、日ころは好まざれど、盃めぐらし、

臥所入

とかくしてふしどにいりぬ。

第三日

調刻

廿日晴、夫々に支度とゝのへ辰のこくの頃に

宿

このやどりを出で、瀬戸明神に詣づ。この

御社

みやしろは頼朝公勧請し給ふとかや。

琵琶社

またびは島弁財天の御やしろに詣づ。

此

こは政子御前の勧請なりとぞ。蛇木と

・不二：冨士　　・高殿：高い建物

・物して：ここでは「料理して」